

.

8月上旬の北軽井沢。夜の山荘の裏庭を車で照らすと、暗闇の中から3頭のニホンジカが姿を現しました。よく見ると、それぞれ体の大きさが異なり、最も大きい1頭、中くらいの1頭、そして小さな1頭という組み合わせです。このような体格差は、母ジカと前年生まれの若鹿、そして今年生まれた子鹿という家族群である可能性を感じさせます。夏の山間部では、前年生まれの若いメスが母親の近くに残り、新しく生まれた子鹿とともに行動する例が知られており、自然な家族の姿と考えられます。

車の前照灯に照らされた3頭は、一瞬こちらの様子をうかがったあと、一斉に身を翻しました。そして長い脚を生かし、軽やかに「ピョン、ピョン」と跳ねるような独特の足取りで、物置の陰へと駆け込んでいきます。夜行性の傾向が強いニホンジカは、昼間は林内で休み、夕方から夜にかけて採食することが多く、人の気配や強い光には非常に敏感です。静かな山荘の庭先も、彼らにとっては餌場の一つになっているのでしょう。

近年、本州各地ではニホンジカの個体数が増加し、山間部ではこうした夜間の遭遇も珍しくなくなりました。一方で、植物の食害や農作物への被害、森林の更新への影響などが大きな課題となっていることも事実です。それでも、暗い森の中を家族そろって寄り添いながら歩き、危険を感じると息を合わせて素早く姿を消していく様子には、野生動物ならではのたくましさとしがらみを感じられます。北軽井沢の夏の夜だからこそ出会えた、自然の営みを象徴する印象的なひとときでした。

(2026年8月上旬／北軽井沢)

